

平成 28 年度 東京都内湾水生生物調査 12 月稚魚調査 速報

●実施状況

平成 28 年 12 月 15 日に稚魚調査を実施した。天気は晴れで、気温 9.6～11.7℃、北よりの風 3.2～5.5m/sec で海は静穏であった。調査当日は大潮で、干潮が 11 時 42 分、満潮は 17 時 11 分であった(東京都港湾局のデータ)。

10 月に比べ、魚類は種類数、個体数ともに少なくなっており、水温の低下に伴い、干潟周辺に生息していた魚類は沖合に移動したものと考えられる。また、早春季に干潟周辺を利用するアユの仔魚が、全ての地点で確認された。

2016/12/15	城南大橋	お台場海浜公園	葛西人工渚
作業時刻	11:00-12:03	9:30-10:30	13:03-13:57
水温(℃)	13.2	12.1	12.0
塩分	26.8	24.9	26.6
透視度	61.0	88.0	67.0
DO(mg/L)	6.6	7.0	8.5
DO飽和度(%)	74.4	76.1	93.6
波浪(m)	0.1	0.2	0.1
pH	7.8	7.7	7.9
水の臭気	無臭	無臭	無臭
備考	干潟は干出していなかった。調査地点では、カモ類の群れが休息していた。干潮の前後で調査を行った。	5名のバードウォッチャーと10名程の観光客がいた。汀線付近は他の地点に比べ透視度が高かった。上げ潮時に調査を行った。	干潟の面積は今年度で最も狭かった。上げ潮時に調査を行った。

●主な出現種等 (速報のため、種名などは未確定)

主な出現種等	城南大橋	お台場海浜公園	葛西人工渚
魚種 (多い順 <sup>注</sup> )	アユ(+)	アユ(+)	アシシロハゼ(r)
		ビリンゴ(r)	アユ(r)
魚類以外	ニホンイサザアミ(+) コウロエンカワヒバリガイ(r)	イソコツブムシ属(+) ニホンイサザアミ(r)	ニホンイサザアミ(m) シラタエビ(+)
備考	他にシラタエビ、ゴカイ科等が採取された。	他にコウロエンカワヒバリガイ、メリタヨコエビ属等が採取された。	他にシオフキガイ等が採取された。 アユは、分析室搬入後に確認された。

注)表中の( )内の記号はだまかな個体数を表す。

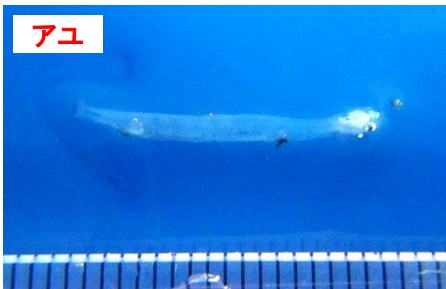
G:1000 個体以上、m:100～1000 個体未満、c:20～100 個体未満、+5-20 個体未満、r:5 個体未満

# 城南大橋 採取試料



城南大橋西詰めにある小規模な干潟で、北側には東京港野鳥公園がある。調査時、干潟は干出していなかった。

## ●主な出現種等



川を遡上する前のアユの稚魚で、海で生活する間は、体の透明感が強い。アユの産卵は、夏から秋にかけて河川中流の砂礫底で行われ、10日～2週間後に孵化する。孵化した仔魚は、卵黄を吸収しながら海に流下し、湾内で浮遊生活を送った後、干潟周辺に出現する。干潟域には体長3～4cmになるまで滞在し、その後、河川を遡上する。



汽水域に生息し、スジエビ類よりも大型で、体長7cm程になる。触角が青く、額角(がっかく:頭の上面のトゲ)がトサカ状に盛り上がる。城南大橋ではあまり採取されない。



汽水域に生息するアミの仲間(エビの仲間ではない)である。魚類等の餌となり、食物連鎖において植物プランクトン等生産者のエネルギーを上位の消費者に渡す重要な役割を果たしている。



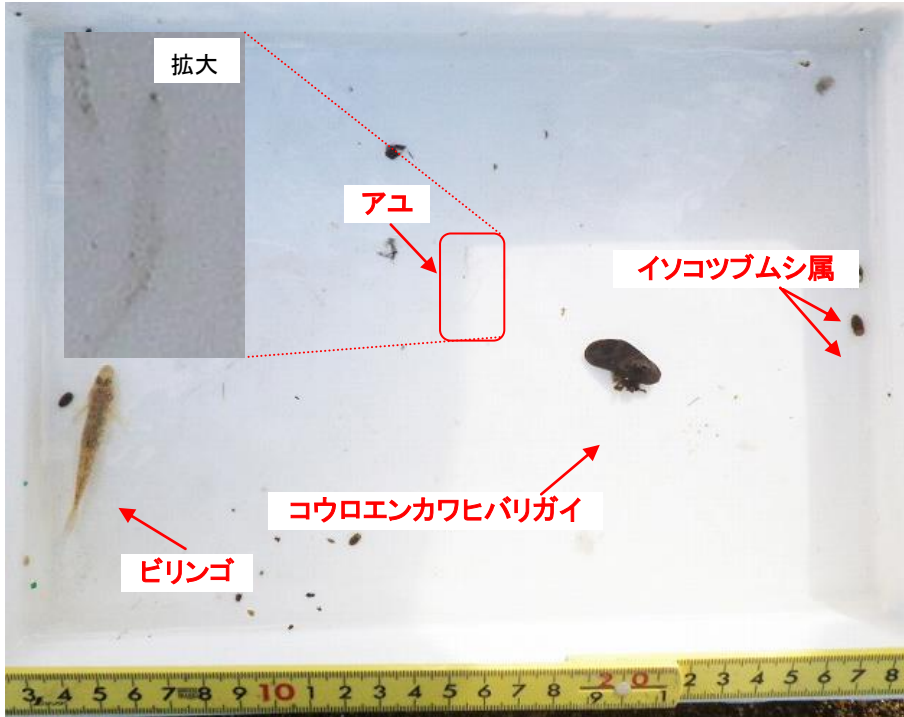
外来種で、東京湾では代表的な付着生物である。ムラサキイガイよりも淡水の影響の強い水域に多く、転石や護岸に付着する。城南大橋の鋼矢板や礫に付着しているのが普通にみられる。



東京湾の干潟では複数種がみられるが、肉眼での識別は難しい。口吻に並ぶ顎片(黒い粒)の配列等で種類の識別を行う。砂粒で膜状の棲管を作り、その中に棲む。干潟に飛来するシギ・チドリ類の餌としても重要である。

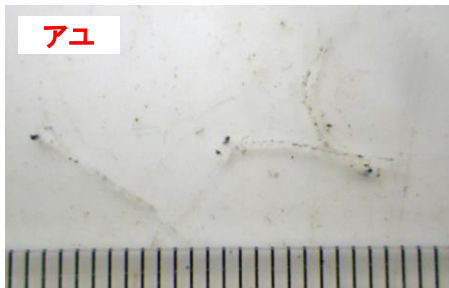


# お台場海浜公園 採取試料



レインボーブリッジの袂にある人工の渚。台場公園や鳥の島で囲まれており、静穏な場所である。

## ●主な出現種等



※解説は、城南大橋を参照。現地で確認された個体数は、城南大橋に比べやや少なかった。



湾奥から湾奥にかけての河口域や潟湖に主に生息する。中層を群れで遊泳し、動物プランクトンを食べている。お台場海浜公園では、周年みられる種類の一つ。



ダンゴムシに近い仲間(等脚類)。体長は 5~8mm で、体を丸めて球状になることができる。体の色には変異が多い。石の下や海藻の中などに生息する。



ヨコエビ(端脚目)の仲間。体長は 5~8mm で、体は横に扁平である。内湾や河口部などの汽水域の転石下に生息する。

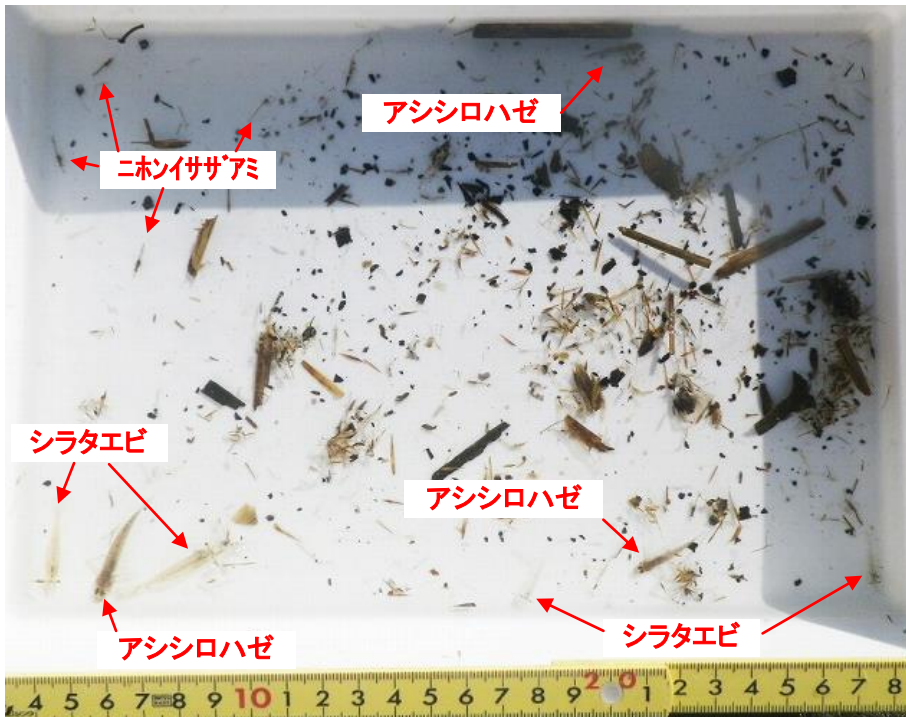


※解説は、城南大橋を参照。群れで生活することが多いが、現地では 1 個体が確認された。



※解説は、城南大橋を参照。海底に点在する礫等に付着していたものが採取されたと考えられる。

# 葛西人工渚 採取試料



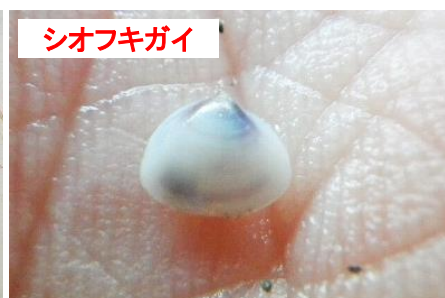
調査地点の様子  
東京湾奥にある広大な人工干潟。一般の立ち入りは禁止されており、野鳥の楽園となっている。

## ●主な出現種等



マハゼに似るが、うろこがやや粗く、体側には白色の横帯がある。初夏～秋にかけて、河口域の沈石や貝殻の下面に産卵する。小型の甲殻類を食べるが、春には干潟域に多く出現し、マハゼの稚魚などを食べる。葛西人工渚では、今年孵化した小型の個体も採取された。

※解説は、城南大橋を参照。葛西人工渚では、最も普通にみられるエビの仲間。



※解説は、城南大橋を参照。葛西人工渚では、大量に採取されることが多いが、今回の調査では少なかった。

内湾奥の干潟域等の砂泥底に生息する。殻は白く、よく膨らむ。殻長は 5cm になるが、採取された個体は殻長 4mm 程度の稚貝であった。

干潟上で休息していた。冬は全体的に白色だが、春～夏の繁殖期には頭部が黒色になる。本種は別名のミヤコドリとも呼ばれ、都民の鳥に指定されている。